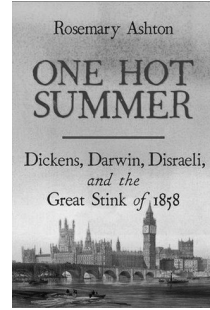


書 評

Rosemary Ashton, *One Hot Summer: Dickens, Darwin, Disraeli, and the Great Stink of 1858*
(New Haven: Yale University Press, 2017)



中田 元子

ローズマリー・アシュトンはいまだに、ジョージ・エリオット、G・H・ルイスらの伝記のほか、ヴィクトリア時代のストランド、ブルームズベリーについて、場所の伝記ともいえる著作をものしている。そして今回は時が主役になった。それはちょうど160年前の「暑いひと夏」。ロンドンで6月の平均最高気温が例年より摂氏で4度以上も高く、史上最高気温(6月16日に日陰で華氏94.5度＝摂氏35度。グリニッジでは一瞬、華氏102度＝摂氏39度)を記録した1858年の夏である。この夏は気温が高いだけでなく雨も少なかったため、太陽に照らされ続けたテムズ川の水深は浅くなり、河岸ではヘドロの堆積がむき出しになって、かねてから汚染が問題視されていた川の臭気が耐え難いものになった。「歴史上とくに重要な年とはみなされていない」(8) 1858年が選ばれたのはひとえにこの「大臭気」ゆえである。副題には、Dの頭文字をもつ三人も並べられており、異例の暑さと大臭気の中での三著名人の公私にわたる出来事(ディケンズの妻との別居と公開朗読旅行、二十年も自然選択理論を考え続けてきたダーウィンが、若い研究者ウォレスが同じ理論を導き出したことを知って動揺し『種の起源』出版を早めた事情、首相になる十年前のディズレーリの議会活動)が描かれる。

歴史に名を残す三人の生活が扱われることは示しながらも、本書の主人公があくまでも1858年夏の四ヶ月であることは章立てでも示している。プロローグでこの夏の出来事の見取り図を示したあと、第一章では1858年を前後の歴史の流れの中で概観する。以降は、ひと月あるいは半月ごとに一章を割り当て、第二章では5月、第三章と第四章で6月、第五章で7月、

第六章で7月から8月にかけてを扱い、第七章でその後の成り行きをまとめる。エピローグでは、その年のクリスマスのパントマイムが夏の暑さと大臭気、耳目を引いた事件をそれぞれの出し物の中にどのように取り入れたかをみている。

副題に三人が選ばれたことに必然性はないといってもよい。アシュトンも書いている通り、この年三人が会ったことはない(42)。そもそも生涯を通じてダーウィンは他の二人と会ったことはなく(二人の小説は読んでいたが)、ディケンズとディズレーリもすれ違い程度にしか交わっていない。しかし表面上のつながりがないことこそがアシュトンのねらいにかなっている。アシュトンは、「歴史的事象の深く詳細な研究」(5)であるマイクロヒストリーの手法によって、「これまで隠れていた関係、型、構造を明らかにする」(5)ことを目的としているからである。その目的のために駆使されるのがデジタル化された『タイムズ』を始めとする十九世紀の新聞雑誌、議会資料、裁判記録、手紙、日記などである。アシュトンはこれらの史料のネットワークの中を縦横無尽に探査することによって、今までは隠れていたつながりを日の下にさらし、その過程で、忘れられていた人物を蘇らせようとする。

今まで見えなかったつながりや忘れられた人物が浮き出てくる様を、ディケンズの別居騒動を出発点として見てみよう。ディケンズは5月にキャサリンとの別居交渉をしていた時、キャサリンの実家ホガース家から離婚法廷に引きずり出されるのではないかと恐れていた。というのも、前年の8月に成立し、この年の1月に施行された「離婚ならびに婚姻関係事件訴訟法」によって、妻の側から離婚を求める訴えを起こすことが容易になり、5月4日のトムキンズ裁判(労働者階級の妻が夫を暴力と不貞行為で訴えた)を始めとして新聞で妻側の勝訴が報道されるようになっていたからである。実際にはホガース家が娘二人を原告側と被告側に分けるような裁判を起こすことはなく、別居の正式調停も無事に整う。それでもなお世間に身の潔白を訴えたいと、周囲の反対を押し切って「個人的声明」を『タイムズ』(6月7日付)と『ハウスホルド・ワーズ』(6月12日付、実際の発行は6月9日)に出したことで、友人を失い、出版社と決別する。しかしその後の朗読旅行で喝采を受けたことで、別居騒動は読者聴衆に影響を与えていないと気

分をよくする。そんなとき弟のフレデリックが突然公演先のダブリンに現れる。いつもの金無心ではなく、妻から配偶者遺棄と不貞行為を理由として離婚裁判所に訴えられそうだというのである。離婚ということでは、ディケンズは長い間、別居した妻に悩まされる友人のエドワード・ブルワー＝リットンに同情していた。別居に際し子供を奪われた妻ロジーナは夫を深く恨んでおり、この6月、大臣職を得るため下院補欠選挙に立候補したエドワードの選挙活動を妨害した(白い衣装をまとって演説会場に現れたロジーナは、数日後精神病院に入院させられ、翌年11月から『オール・ザ・イヤー・ラウンド』で連載されたコリンズ『白衣の女』のモデルになった)。ブルワー＝リットンの友人で彼を大臣にしようと尽力していたディズレーリ(当時はダービー内閣の蔵相)もロジーナの怒りをかい、悪評を立てられた。離婚法廷はダーウィンの関心も引いた。6月に、ダーウィンが通っていた水治療の医師エドワード・レインが被告となるからである。レインはロビンソン夫人という患者との不倫をその夫から訴えられた。ダーウィンは自分の体に合った治療を施してくれる医師のことが気になり、この夏、裁判の成り行きを新聞で追っていた(レインの裁判は、翌年3月、フレデリック・ディケンズの裁判と同日に同じ法廷で、一部同じ裁判官によって裁かれることになる)。このように、新しい離婚法によって、ディケンズはもちろん、円満な夫婦生活を営んでいたダーウィンやディズレーリも、程度の差はあれ影響を受けたことが示される。また、この夏連日新聞を賑わせていたロビンソン夫人の若い医師との性的冒険の妄想が、今も変わらぬゴシップの供給源として読者の前に蘇る。

初めに記したように章立ては時間別になっている。しかし、それは事件が表面に現れた時であって、事件の原因は過去にある。また、関連する出来事や人物についても述べる必要が出てくれば、それらの事人物のそれまでの経緯や履歴も語らねばならない。このような作業の中で、各章の時間は定められた範囲をこえて大きく行き来する。ちょうど、臭気を放つテムズ川が、潮の満ち干によって流れを反転するように、語られる時間は行ったり来たりする。

そのテムズ川、とりわけ1858年夏を特別な夏とした大臭気に話を移そう。長年懸案とされてきたテムズ川の汚染対策として、首都下水道委員会

がジョウゼフ・バザルジェットの遮集式下水道建設案採用を決めてから二年、だれが費用を負担するかなどの点で議論が続いていたが、この夏の大臭気が最後の藁になって、いわゆる「テムズ浄化法」が7月末スピード成立する。この法律の制定にあたって大活躍したのがディズレーリである。とはいえ、三人のDをめぐるこの夏の出来事のうちに、ディズレーリに関することは他の二人に比べるとあまり知られていないだろう。ディズレーリの伝記でも、アンドレ・モロワは1858年の活動をまったく取り上げていないし、アシュトンが参考文献にあげているロバート・ブレイクによる伝記およびマニペニーとバックルの伝記は、首相ダービーが議会の冒頭演説でこの年の主要課題と宣言したインド法案成立に関わる動きのみを取り上げている。しかしアシュトンは、この夏ディズレーリが次々と法案を成立させる活躍を描く。「この夏最大の政治的成功かつ公益ある功績」(285)とアシュトンが評価する「テムズ浄化法」の他に、同じく長年改革が叫ばれてきた医事問題の解決策である「医師法」(医師の登録制を定めた)、新約聖書による宣誓なしでユダヤ人に下院議員の資格を認める「ユダヤ人解放法」などを成立させ、一方で議員に立候補する者は一定の財産がなければならないと定めた法律を廃止した。ディズレーリは、蔵相と兼務していた下院院内総務として、法案の扱いについて議会での調整にエネルギーと技量を発揮した。首相ダービーが痛風で登院できないことも多かったことから責任は重くなったが、それだけ手腕を見せる機会を得たと言うこともできる。アシュトンによれば、この夏はディズレーリにとって「初めて政治的権力と名声を味わった」(36)勝利の夏となった。

大臭気によってテムズ川観光船の運航は取りやめになったが、臭気にもかかわらず人々を集める見世物もあった。この年の1月に進水した世界最大の鋼鉄蒸気船グレート・イースタン(リヴァイアサン)号である。進水はしたものの資金不足から完成には至ってはならずデトフォードに係留されていた。これが、5月末、一人半クラウンの入場料で一般公開された。ヴィクトリア女王も6月末に見物に訪れ、その巨大さに圧倒されたことと、大臭気に具合が悪くなったことを日記と娘への手紙に記している。グレート・イースタン号は後に大西洋電信ケーブルの敷設にあたることになるが、そのケーブルはこの夏一旦初めて敷設に成功、女王とアメリカのブキャナン

大統領が交信した。グレート・イースタン号の設計者ブルネルが進水用の巨大なチェーンの前に立つ写真を撮ったロバート・ハウレットは、画家フリスに頼まれてダービーの写真を撮っており、その写真をもとに描かれた《ダービーの日》は5月開幕のロイヤル・アカデミー展で展示された。そこには同時に1100枚から1200枚の絵画と約260点の彫像が展示されたとのことである。本書を読むと、そのうち一点の作品を出発点に、まったく別の1858年夏のロンドンの光景を描くこともできるのではないかという思いに誘われる。

——筑波大学教授